

DAFTAR ISI

Pengesahan

Kata pengantar

Daftar isi

Bab I Pendahuluan

1.1 Latar Belakang Masalah.....	1
1.2 Pembatasan Masalah.....	5
1.3 Tujuan Penelitian.....	5
1.4 Metode Penelitian.....	5
1.5 Organisasi Penelitian.....	9

Bab II Teori Hermeneutik Paul Ricoeur

2.1 Teori Hermeneutik Paul Ricoeur.....	10
2.2 Ruang Lingkup Hermeneutik.....	11
2.3 Arti memahami.....	15
2.3.1 Memahami Teks Kumo to Namekuji to Tanuki.....	17

Bab III Makna Cerita Pendek Kumo to Namekuji to Tanuki

3. 1 Peristiwa dalam cerita pendek Kumo to Namekuji to Tanuki.....	20
3.1.1 Persaingan.....	23
3.1.2 Pertikaian.....	27
3.2 Karakter Kumo, Namekuji, Tanuki.....	31

Bab IV Kesimpulan.....	43
------------------------	----

Sinopsis

宮沢賢治作『蜘蛛となめくじと狸』の短編の意味
(ヘルメネチック・アプローチを通して)

序論

筆者は宮沢賢治の短編作品である『蜘蛛となめくじと狸』に出てくる登場人物の三人の競争と抗争についてヘルメネチック理論で研究する。

ヘルメネチックというのは、あることについて過程で意味を変換するということである。また、隠された意味を見つけるためにこの過程を解釈すると、意味がはっきりわかるということである。

ピオニール（ロシアの共産主義少年団）の一員である Paul Ricoeur は、ヘルメネチック理論を研究していて、自分の考え方を持っている。彼は、彼が書いた本の中の隠された意味がはっきりわかるのである。

筆者は、『蜘蛛となめくじと狸』の短編に出てくる登場人物の三人の競争と抗争、そして彼らの性格について研究する。

『蜘蛛となめくじと狸』の短編は宮沢賢治によって書かれたものである。『蜘蛛となめくじと狸』は、日本の子供の話で、彼が22歳の時「1918年」の夏に完成したものである。

本論

『蜘蛛となめくじと狸』では、どこでもある社会生活のユニークなことが書かれている。

この話には、事件や登場人物のトリックがよく出てくる。話の中で起こった事件は、登場人物の性格と行動が原因となって起こった。一番よく出てくるのは、蜘蛛となめくじと狸である。三人が出てくる話で、三人は競争し、抗争し、またそれを続けるのである。各登場人物の性格は事件を通して、よくわかる。

1. 競争

各自、自分の利益のことばかり求めるので、競争することがよく書かれている。

ある日夫婦の蜘蛛は、葉のかげにかくれてお茶をのんでいますと、下の方でへらへらした声で歌うものがあります。『あゝかいと手長野くうも、出来た息子は二百疋、めくそ。はんかけ、虫かのなみだ、大きいところで稗のつぶ』。見るとそれは大きな銀色のなめくじした。蜘蛛のおかみさんはくやしがつて、まるで火がついたように泣きました。

(『蜘蛛となめくじと狸』：223-224)

三 ページ

上の事件は、競争に勝ちたいというなめくじの願望から起きたものである。

その競争に参加する人々はみんな出世している。社会から自分のすごさを見られているので、その競争はいつまでも続くことになるのである。

2. 抗争

『蜘蛛となめくじと狸』の話では、小さな争いがだんだんと大きな抗争になる。そして、狸は負けたことを認めないので、蜘蛛に悪口を言うのである。

『ワッハッハ。』と笑う声がしてそれから大きい声で歌うのが聞こえました。『あんまり網がまずいで、八千二百里旅の蚊も、くうんとうなってまわれ右。』見るとそれは顔を洗ったことない狸でした。

(『蜘蛛となめくじと狸』：

225)

その争いの過程は、はっきりが決着がつかないかぎり、いつまでも抗争が終わらないのである。どちらかが負けたと認めないかぎり、いつまでもお互いが意地を張るのである。

四ペ - ジ

3. 蜘蛛となめくじと狸の性格

話には登場人物の色々な性格が出てくる。蜘蛛はだます人である。

『ここはどこでござりまするな。』と云いながらめくらのかげろうが木文をついてやって参りました。『ここは宿屋ですよ』と蜘蛛が六つの服を別々にパチパチさせて云いました。かげろうはやれやれというように、巢へ腰をかけました。蜘蛛は走ってでました。そして、『さあ、お茶をおあがりなさい。』

と云いながらかげろうの月同中にむんずと噛みつき
ました。かげろうはお茶をとろうとして出した手を
空にあげて、バタバタもがきながら。
(『蜘蛛となめくじと狸』：220-221)

蜘蛛はえさにする、目が見えないとんぼをだます。目のみえないとん
ぼは蜘蛛の悪だくみを知らずに。

なめくじは周りに親切にするので人気があるが、実際はそれは反面で
あり、相手を食べてしまう。

『も少しよく嘗めないとあとで大変ですよ。今度ま
た来てももう直してあげませによ。ハッハハ。』と
なめくじはもがもが返事をしながらやはりとかげを
嘗めつづけました。

(『蜘蛛となめくじと狸』：230)

五 ペ - ジ

なめくじは人をだますという性格を持っている。彼は足が痛いとい
うおおとかげを助けるふりをして、実際にはおおとかげを食べてしまうの
である。

狸は山猫と神様の仲介をして、周りからえらい人だと思われるよう
になった。狸は、ほかの動物の問題を解決しようと手助けをしているので、
尊敬されている。例えば、うさぎは狸に助けを求めて訪ねてくる。

『ああありがたや、山猫さま。私のようないくじな
いものでも助かりますなら手の二本やそこらはいと
いませぬ。なまねこ、なまねこ。』狸は、もうなみ

だで身体もふやけそうに泣いたふりをしました。
『なまねこ、なまねこ。私のようなとてもかなわぬ
あさましいものでも、お役にたてて下されますか。
ああありがたや。生猫生ねこ。おぼしめしのおり。
むにゃむにゃ。』兎はすっかりなくなってしまいま
した。そこで狸のおなかの中で云いました。『すつ
かりだまされた。お前の腹の中はまっくろだ。ああ
くやし。』

(『蜘蛛となめくじと狸』 : 236-237

)

しかし、狸はうさぎに対してうそをついたのである。

六 ペ - ジ

結論

筆者は宮沢賢治の短編作品の『蜘蛛となめくじと狸』に出てくる登場人物の三人の競争と抗争についてヘルメネチック理論で研究して、次の結論を引き出すことができる。

* ヘルメネチックというのはあることについて、過程で意味を変換するということである。また、隠された意味を見つけるために、この過程を解釈すると意味がはっきりわかるということである。

* 蜘蛛となめくじと狸の三人が出てくる話で、三人は競争し、抗争し、またそれを続けるのである。各登場人物の性格は事件を通して、よくわかる。

* 短編では、『不誠実』の意味を持っている。

Daftar Pustaka

Biografi Pengarang

Riwayat hidup penulis